

# 向こう三軒両隣 ～世代間交流促進計画～

a2200520 里井 裕子

## 背景・目的

近年少子高齢化や核家族化、高齢者世帯・高齢者単身世帯の増加が社会的な問題として様々な対策が取られている。また女性の職場進出も著しく、これらが進むにつれて子どもと大人が接する機会が大幅に減少しており、本来日常の中で伝承されていた生活の知恵や礼儀作法、伝統、雑学等を日常生活の中で知ることが出来る機会は少なくなったといえる。地方の中・小規模都市でも以上のような問題が潜在している。

そこで現代の家族構成や人々の考え方、地域特性を考慮しながら、地域コミュニケーションを促進出来るようなソフトや空間を模索し提案することを目的としている。

## 方法

対象地域を会津若松市とし、図1のような流れで研究を行った。調査分析の視点は地区特性を考慮した上で、4つの分類(商業地域・古い住宅地・新しい住宅地・マンション)とした。

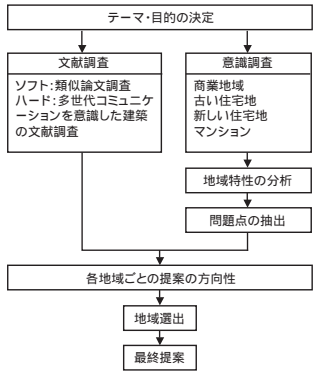


図1: 研究のフローチャート

表1: アンケートの配布・回収状況と地域特性

対象地域	配布地域	配布方法	回収方法	配布世帯数	回収率	回答部数	地域特性
商業地	中町	手渡し	郵送	79	65.8%	68部	高齢化が進んでいる。商業地のため通りには車通りも多く、城下町特有の入り組んだ路地にはあまり住居の姿は見受けられない。引きこもりがちな高齢者も多いと思われる。マンション住民との交流機会があまりない。
	大町						
	中央						
古い住宅地	居合団地	手渡し	51	74.5%	42部	高齢化の進む住宅地であるが、月に一度の清掃活動の参加率は高い。だが新しい入居者が地域コミュニティに馴染むのは生活スタイルの差などから容易ではないようだ。子どもが道路で遊んでいる姿が見受けられた。	
新しい住宅地	飯町町	ポスト	102	12.7%	21部	若い核家族世帯が多い。共働き家庭が多く、平日の日中は外に人の気配を感じられなかった。子どものいる世帯も多く、同世代の子を持つ親同士の交流は比較的もたれている。生活スタイルの差から時間などを気にしてあまり親密に交流できていない。	
マンション	市内3棟	ポスト	100	23%	27部	まだ新しく両隣の人を知らないという人もいまだコミュニティが十分に形成されていない。敷地内での交流、挨拶程度が多い。	
	合計			332	44%	158部	

## 文献調査結果

各地で多世代交流のための機会づくりが行われている。それらを調査分析し、今後の課題を把握するものや、多世代交流を促すための提案に必要な、人々の経験を調査したものなど様々な論文が発表されていた。

### Key Word

駄菓子屋:狭い空間の中で、自然と子どもと大人の他世代交流が行われていた。異い物という目的だけでなく、子どもの居場所であった。

縁側:子どもにとっては多様な遊びを展開できるスペースであり、同時に高齢者にとっては子どもを見守りやすい環境である。

コミュニティハウス:住民が運営する地域施設

立ち寄り型である存在や利用方法が住民に知られたいため、参加機会提供型にしていく必要がある。

参加者の特定:活動の継続、親密な関係を築くことにつながる。

飲食:飲むコトや食べるコトは、人との出会い、コミュニケーションといった人とのかわりであり、人と人を結びつける場である。( 太郎良 )

- 出展 日本建築学会大会学術講演発表要旨集2003-9 7402 「高齢者の社会参加に向けた子どもとの相互交流の実態と評価」  
 2006-9 5465 「子どもと高齢者の交流における場所モデルに関する研究」  
 2002-9 (7370)・2003-9 (7254, 7255) 「地方小都市の中心市街地におけるコミュニティハウスに関する研究」  
 2003-9 7384 「成熟型住宅地におけるコミュニティの形態」  
 2005-9 5002 「事例にみる交流の場の立地・設立・もてなしの状況」

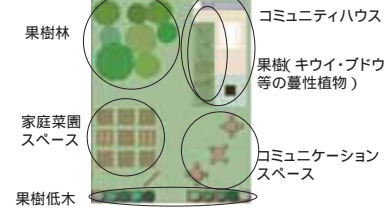
## 地域別提案

### 商業地

空き地を利用したコミュニティガーデンを通して交流をはかる。また空き家を利用したコミュニティ施設も考えられるがどちらにせよ住民参加型で作り上げることが重要になる。

- ・コミュニティガーデン(図2)

道路に接して果樹の低木を植える。実った果実に人々は足を止めるであろう。さらに中に果樹の中・高木を植え、収穫の際子どもと大人の交流が生まれる。子どもは木登りすることも出来る。また近隣住民のために家庭菜園スペースを設ける。収穫したものでコミュニティハウスで料理教室を行うプログラムも可能。コミュニティハウスのアプローチ部分が果樹欄になっており、収穫が終わって上に板をはると、雪が積もりスキーやソリ滑りを楽しむことが出来る。



### 住宅地(古)

～居合団地を例として～

- ・地域概要

昭和45年に造成が始まり、分譲され、現在は高齢化の進む老人団地とも呼ばれる古い住宅地である。居合町・堤町の二つの町、8つの町内会で形成されているこの団地には保育園や中学校、高校、専門学校があり多世代交流が盛んに行われる可能性を十分に持つ地域である。

- ・計画概要

団地内12箇所の空き家・空き地を利用したコミュニケーションを促進するための空間、システムを点在させる。(図3参照)その維持管理には、団地の住民によるNPO居合を結成し、町内会と連携して長期的に交流促進に取り組む。

- ・NPO居合

目的: 高齢化が進む団地で住民同士が協力して快適に楽しく生活していく架け橋となる。

活動: 団地内に点在するコミュニティスペースの維持管理、企画・運営

- ・活動の広報
- ・団地全体の空き家・空き地の把握・管理
- ・人材の発掘(偉人・賢人・腕白慢)

- 職員: 団地内の主婦や、近年退職

後の高齢者が中心  
 ・ひきこもりがちな高齢者にもやってみよう、生き甲斐を感じてもらおう。

### 住宅地(新)

多世代交流の促進につながる可能性を持つため、今後コモンスペースを意識した区画設計が必要となる。さらにコミュニケーションを意識した低層集合住宅を合わせて計画することにより、一層多世代交流のきっかけをつくりだすことにつながる。

休日は家族で過ごす家庭が多いので、イベントを通して家族間の交流のきっかけが生まれるであろう。

- ・低層集合住宅

向こう三軒両隣(6棟)がコモンスペースを囲んで配置されるようにする。リビングが共有スペースと接しているとプライベート空間とパブリック空間の境界が曖昧になるおそれがあることに注意して計画する。

### マンション

住民が互いを知るきっかけとなるようなイベントを提案する。さらに孤立しがちなマンションと近隣住民との交流をはかるための空間をつくる。

- ・マンション接地型コミュニティスペース

従来マンション内に設けられるコミュニティスペースを外郭マンションと接するよう( )に設ける。近隣住民と共有することにより、孤立しがちなマンション住民と交流をもつことが可能。またあわせて年中行事を交流イベントとして住民が協力して行うようにする。マンションには市外から転居してきた住民も多いため、会津の文化に触れることができる興味深いものとなるであろう。

表2: NPO居合の交流促進プログラム

春	夏	秋	冬	通年
恒例 舟舟会コンクール 桜の花びらアートコンテスト 野菜料理教室(つくし、ふきのとう、味噌煮 等) 夏祭り 夕涼み水遊び ほたる鑑賞 ビオトープで育つように 芋煮会 恒例: 果樹林で収穫の喜びを分かち合う 「5月5日」 たばこ市	恒例: 果樹林で収穫の喜びを分かち合う 「5月5日」 たばこ市	恒例: 果樹林で収穫の喜びを分かち合う 「5月5日」 たばこ市	恒例: 果樹林で収穫の喜びを分かち合う 「5月5日」 たばこ市	恒例: 果樹林で収穫の喜びを分かち合う 「5月5日」 たばこ市

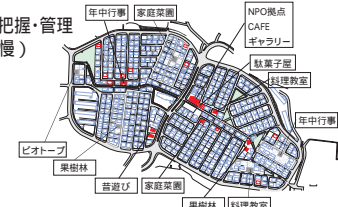


図3: 居合団地コミュニティスペース配置案

## まとめ

昔に比べ多世代の交流が減少してきている背景には核家族化や単身世帯の増加などの環境の変化だけでなく、近所付き合い等の意識の変化も影響しており、昔の様な日常生活における活発な多世代交流をすべての人に求めることは不可能である。だがさまざまな交流促進プログラムを通して地域の人と交流していくうちに他世代の人と自然に接することができるようになり、イベント時以外も家族ぐるみで交流していくうちに礼儀作法や伝統、雑学や生活の知恵を学べるであろう。それには地区の特性に見合った交流促進計画が必要であり、地域内の人材採用や多様なプログラムを用意することにより、気軽に参加できるような環境作りが不可欠である。

今回NPO団体の結成を提案したが、交流促進計画を成功させるには運営形態と資金調達が大きな課題となるであろう。